
ふたつのみち

浅葉りな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたつのみち

【Nコード】

N2856C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

兄弟ものです。ある雪の日、新任の教師にふたりの関係を知られてしまい――

あの日はたしか、ちらちら雪が降っていたのだったような気がする。けれども気がしているだけで、もしかしたら違ったのかもしれない。なにしろずいぶんと昔のことだ。十年前といえば、まだたったの十七年しか生きていない僕からすれば、かなりの昔ということになる。

あの日、僕は見知らぬ女の人に手を引かれて、知らない家に連れて行かれた。

おとうさんとおかあさんが、一度に死んでしまったからだ。

まだ小学生だった僕には、誰も詳しいことを話してはくれなかった。でも、親せきの人たちの会話から、だいたいの事情はわかっていた。

おかあさんはおとうさんと無理心中したのだそうだ。おとうさんはずっと前から浮気をしていて、おかあさんは常々それに胸を痛めていたらしい。

もつとも、僕がそういったことを理解するようになったのはつい最近だ。あの頃、まだ僕は幼くて、浮気だとか無理心中だとか、難しい言葉の意味を理解できなかったのだ。ただ、なんとなく、よくないことが起こってふたりとも死んでしまったのだ、と僕は思っていた。

その上、僕は自分が悪い子だったからふたりとも僕を置いて行つたに違いないと思い込んでいた。

親せきはほとんど他人に近いほどの遠縁ばかりで、そんな扱いにくい子供だった僕を引きとろうとする家があるはずもなく、僕はあやうく施設に入れられるところだった。

けれども、僕を引き取りたいと申し出た人がひとりだけいた。おとうさんの浮気相手だ。

自分たちが引き取る気もないくせに、親せきの人たちはおとうさ

んの浮気相手を責めた。おまえのような女に子供を渡せるか、となじた。

けれども、おとうさんの浮気相手だった人は、ひとも反論することなく、控えめに涙をこぼしたのだ。涙に濡れた黒い瞳を僕に向け「透さん、すみません」と頭を下げたのだ。まるで一人前の大人にするように。

だから僕はこの人の家の子供になろう、と思った。嘘やごまかしを使わなかった大人は彼女だけだったから。

そうして僕は、あの雪の日に、彼女の家の子になった。

そのときにはじめて、僕は恭一に出会ったのだ。

たった三ヶ月しか年の変わらない異母弟。恭一の瞳は母親に似て、濡れた黒い色をしていた。

ふと身を起すと、窓の外で雪がちらついているのが目に入って、僕は今さらながらに自分が随分と冷え切ってしまっていることに気がついた。脱ぎ捨ててあるシャツを拾い、肩に羽織る。

「……悪い、寒かったか？」

気だるげな仕種で顔を上げ、恭一が言う。不安げな瞳に、僕は微笑みかけてやった。

「大丈夫だよ。こうしてると、あったかい」

僕が身を寄せると、恭一は優しく腕をまわす。室温はかなり低いはずなのに、どういうわけか充分に暖かいような気がした。

僕は少し手を伸ばして、離れたところに放り出しているコートを引き寄せた。恭一とふたりで羽織るには少し小さいけれど、軽くかけるくらいなら、これでも充分だ。ふたりで頭からかぶると、外の雪とあいまって、なんだか子供時代に戻ったような気分になった。

僕たちはずっと、こうしてふたり寄り添って歩いてきたのだ。

「積もりそうだな。……そろそろ、帰ろうか？ 歩けるか？」

「大丈夫だってば」

僕の体の節々に残る痛みを、自分のせいだと自覚しているらしく、

恭一はやけに優しい。僕は恭一にもたれかかり、目を閉じた。

そのとき、キィ、という嫌な音が聞こえた。

僕は顔を上げた。ドアがわずかに開いていて、産休代理でやってきた真田先生がぼかんと口を空けて僕たちを見ている。

普段はあまり人の来ない資料室だからと、油断した。僕は舌打ちし、シャツに腕を通した。

「お前たち、こんなところで何を」

問い掛けておきながら、真田先生は手で僕たちをさえぎる。

「いや、答えなくてもいい。場所を移そう。どこか暖かいところで話は聞く」

そうして、あごに手を当てて考え込むと、ひとりで先に立って歩き出す。

もしかしたら、このまま無視して帰ってしまったも気づかれないのではないかと思ったけれど、とりあえず恭一をうながして、僕は真田先生のあとを追った。

連れて行かれた先は保健室だった。保健室の先生はちょうど留守で、真田先生がコーヒーを淹れてくれた。

正直、この暖かい空間で熱いコーヒーなど飲みたくもなかったけれど、そこまで可愛げのないことを言うのもどうかと思ったので黙っておいた。

そうやってコーヒーを飲んで一息ついてから、真田先生はこわばった顔で僕と恭一に視線を向ける。

「先生」

僕は真田先生がなにか言うより早く、小さく手を挙げた。

「事情の説明は僕がします。恭一は口下手なので」

「いや、オレが……」

恭一が立ち上がって、異を唱える。僕は恭一に視線を向けると、首を振った。

「ダメだよ。恭一は説明とか苦手なんだから。大丈夫だよ、僕ひと

りでも」

「大丈夫じゃない。説明ならオレがする。お前が気にすることなんかない」

「……いいから」

僕は強く言った。恭一は黙り込む。

結局、恭一は僕が強く言えば逆らえなどしないのだ。あまりいいことだとは思えないけれど、こういうときには仕方がない。

「先生、カウンセリングルームの方でかまいませんか？」

「あ、ああ、その方が落ち着いて話ができるな」

真田先生はがくがくうなずく。カップとソーサーを持ったまま、保健室の隣へしつらえてある、カウンセリングルームへと入っていく。

あそこは保健室から入る入り口ひとつきりしか出入り口がないし、なにより外へは声が聞こえないように防音処理がほどこしてある。

恭一に話を聞かせずにすむ。僕にとっても都合だった。

僕はひと目がないのをいいことに、隣でうつむいている恭一の顔を上げさせて額にキスをした。

恭一は今にも泣き出しそうだ。僕はぎゅっと、恭一を抱きしめた。離れがたい体を無理矢理もぎはなし、僕はひとりでカウンセリングルームへと入った。

カウンセリングルームは暖房がきいていないらしく、空気がひんやりと心地よかった。背筋がぴんと伸びる気する。

室内には大きなテーブルがひとつと、それを挟んで椅子がふたつがある。その一方に真田先生が、緊張した面持ちで座っている。僕はドアに内側から鍵をかけ、空いている椅子にかけた。

「なにも鍵までかけなくてもいいんじゃないのか？」

「いえ、きつと、そうしないと、恭一が入ってこようとしますから」

「恭一に聞かれたくないのか？ やっぱり——なにか、脅されてるのか？」

「いえ、まさか。義母も恭一も優しいですよ」

恭一が僕を脅すなど、あるはずがなかった。

優しすぎて、そのせいで僕に縛られているかわいそうな恭一。その恭一が僕を脅すなんてことは太陽が西から昇るのと同じくらいにありえない。

「なら、どうしてあんなことを。吉野なら、女の子にだってモテるだろう？」

「でもそれでも恭一がいいんだ、と言ったら、どうしますか？」

「その気持ちもわからんでもないさ。オレも昔は男子校にいて、そんな気分になったこともあったよ。卒業したら不思議と、そんなことも思わなくなったけどな。オレも同じだったから、よくわかる」

「どうやら真田先生は、僕と恭一が結んでいる関係を思春期ゆえの一時的なものだと思っているらしい。脅されているとか、そういった面倒そうな関係でないというのがわかった途端、頬に赤みがさした。」

なんて、わかりやすいんだろう。その単純で善良でまだ情熱を失っていないところが、むしろ好ましく思えた。

「僕とまったく同じ経験をしたと、そうおっしゃるんですか？」

真田先生に悪気がないのがわかるから、僕は静かに言った。

「そういうわけじゃないが、似たような経験はしたことがある」

「でも、それはまったく同じわけじゃないし、もしまったく同じだったとしたって、先生と僕は違う人間なんだから、同じことを思ったりはしないはずじゃありませんか？」

「それは……」

先生はしばし、言いよどむ。そして、自分に言い聞かせるように、強く、続ける。

「あんなのは不自然なんだよ。吉野はもっと普通の、同い年くらいの女の子と恋愛した方がいいんじゃないか？」

「どうして、不自然なのはいけないんですか？」

「どうして、って……間違ってるだろう」

もごもごと、真田先生は口の中でつぶやく。

「でも、女の子と違って僕は妊娠もしませんし、他の相手と関係を結んでいるわけでもないの。で性病も心配ありません。なにが問題なんでしょう？」

「そういう話をしてるんじゃないだろう」

「じゃあ、どういう話なんです？」

真田先生は今度こそ本当に、言葉につまってしまふ。僕は続けた。「僕たちはただ、お互いが必要なだけです。そのどこに問題があるんですか？」

「お前たちは兄弟じゃないか」

「ええ、でも僕は妊娠しないので遺伝上での問題はないと思います」

「そういうことじゃないだろう」

「そういうことです。それに僕たちがもし兄弟じゃなかったら、きっとこんなふうにはなってなかったと思います」

きつとこんなことを言っても、真田先生はわかってくれないに違いないけれど。

僕はそつと、ため息をついた。

恭一は僕に負い目があると、ずっと思いついてる。

僕の本当のおとうさんとおかあさんが死んでしまったのは自分のせいで、だから自分は僕のために生きなければならぬのだと、思い込んでしまっている。

自分が寒くても僕が暖かければいいし、自分がつらくても僕が幸せならいいのだ。

僕だってそんなの、おかしいと思う。兄弟だとか男同士だとかそんなどうでもいいことよりもずっとずっと、間違っていることだと思っている。

けれども、僕がなにを言ったって、これだけ変えることができない。僕の言葉は本当の意味で恭一に届いていたりはないから。

だから、僕は恭一に守られたままでいようと思う。

恭一が、そうでなければ立っていられないというのなら、僕はおとなしく恭一に守られていてやろうと思う。

僕だって、もはや、恭一がいなければ立っていることすらできないのだ。気づいたときには、僕はもう恭一に依存しきっていた。今さら、手を離すことはできない。

僕は僕のエゴで、恭一を縛りつけるしかないのだ。恭一が恭一のエゴで僕を守りつづけようとするように。

他に暖かいものがあるだなんて、考えたこともなかった。

僕たちは自然に、寄り添いあった。そうして今まで生きてきた。それだけだ。最初から間違っていた、ただそれだけだ。

「先生は、寒いって思ったことはありませんよね？」

「え？ ああ、そりゃあ、もちろん」

「先生の手はすごく冷たいし、僕の手だってすごく冷たいけど」

僕は立ち上がって身を乗り出し、真田先生の手を握った。先生は怯えるように身をひく。僕は手を離さなかった。

「でも、こうしてれば、だんだん暖かくなります。これは間違ったことですか？ いけないことですか？」

僕は真田先生の目をじっと見つめた。先生は目を伏せる。

わかってくれる、のだろうか。そんなことがあるわけがないというのに、僕ははかない期待を抱いた。

「やっぱり、お前たちは間違ってる」

真田先生は顔を上げる。

「でも、どこが間違ってるなにが正しいのか、オレにもわからない」
最後につけ加えた言葉は独白のように聞こえた。

——ごめんなさい。

僕は心の中で、真田先生に謝った。

口に出して謝っても、きっと、困られるだけだから、何度も心の中で頭を下げた。

間違っているのも、おかしいのも、僕たちふたりの方なのだ。

でも僕たちは、頭でそれを理解していても、それを認めることはできない。

だって認めてしまったら、僕たちはもう、立っていられなくなっ

てしまう。どうしていいのかわからなくなってしまった。

僕は朝顔のつるなのだ。恭一という他の花の茎にまわりついてしまった、馬鹿な朝顔。

今さらどうにもできはしない。僕か恭一か、どちらかが枯れてしまふまで、この関係は変わりはない。

「……もう、遅いな」

しばらくして、真田先生がぼつりと言う。僕の手をはずさせると立ち上がり、ドアのほうへ歩いていく。

「そろそろ帰れ。家の人が心配するだろう」

「……はい」

僕は真田先生のあとについて、カウンセリングルームを出た。

保健室はやはり、カウンセリングルームに比べるととても暖かい。

恭一は出てきた僕を見ると、あわてた様子で立ち上がる。僕は恭一のそばに行つて、胸元に顔を埋めた。

「帰っていいってさ」

「何もされなかったか!？」

恭一は真田先生が目の前にいるというのに、遠慮しようとすらない。僕は苦笑し、首を振った。

「大丈夫だよ。帰ろう」

コートに腕を通しながら、僕は言った。恭一はダッフルコートのボタンを留めてくれ、マフラーを巻いてくれ、手袋をはめさせてくれる。子供に戻ったみたいだ、と思つて、僕は笑った。

恭一はいつもこうやって、服の脱ぎ着すら手伝おうとするけれど、その度に僕は子供時代を思い出す。子供の頃は、僕が恭一に服を着せてやつたりしていたのだ。恭一は手先があまり器用ではなくて、いつも僕がボタンをかけてやつていた。今ではすっかり、それが逆転している。そう思うと、なんだかおかしい。

ふと真田先生を見ると、啞然とした顔で僕たちを見ている。慣れない人には、やはり、奇妙に映るのだろう。これが僕たちの

普通だなんて、説明したって信じてもらえないに違いない。

僕は真田先生に頭を下げた。真田先生は困ったように笑う。

「……さようなら」

言うのと、先生は手を振ってくる。僕も手を振り返して、恭一と一緒に保健室を出た。

昇降口から外へ出ると、雪は勢いを増していた。今はまだ、地面につくそばから融けているけれど、そのうちにすっかり積もってしまいうに違いない。

僕は恭一の手を握った。恭一は驚いたように僕を見る。僕は微笑んで、恭一に寄り添った。

あの雪の日に、僕は恭一に出逢った。そうして僕たちは、肌をさす凍てつく寒さから身を守ろうと、ふたりで身を寄せあったのだ。

「帰ろう」

僕は言った。

恭一は黙って、また、僕の肩を抱いた。素肌同士が触れあっていくわけではないのに、触れている部分は、暖かい。

僕と恭一は、ゆっくり一歩、踏み出した。

僕たちの残した足跡は、きつと、すぐに隠されてしまうだろう。けれども、それでかまわない。

なにも残らないし、なにも残さない。それでいいのだ。

傘もささずに歩いているから、僕たちの上には雪が積もりはじめている。

家に着けばこの雪も、融けて、消えてしまうだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2856c/>

ふたつのみち

2010年10月8日15時07分発行